

トランスジェンダーのオフィストイレにおける利用実態 オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究 その3

正会員 ○高橋 未樹子* 非会員 岩本 健良***
正会員 日野 晶子** 非会員 大出 摩紀*

オフィス トイレ トランスジェンダー
性自認 LGBT

1. 研究の背景と本報の目的

本研究は、トランスジェンダーも含めて性自認に関わらず、だれもが安心して快適に利用できるオフィストイレの実現を目指している。その1では、有職者30,000人へのインターネットアンケート調査から、トランスジェンダー（以下、トランス）の割合、シスジェンダー（以下、シス）のトランスに対する意識を明らかにし、設備面の対応だけでなく性的マイノリティについて皆が正しい知識をもつことも重要であることを報告した。さらにその2では、シスとトランス間のオフィストイレの満足度の違いを明らかにし、ポートフォリオ分析から、設備面では「トイレの選択肢」が最優先課題であることを明らかにした。

そこで、本報ではトランスのオフィストイレの利用実態を調査し、オフィストイレにどのような「選択肢」が求められるのかを明らかにする。

2. 調査方法

その1、2で既報の通り、アンケート調査は2017年11月に行った。2016年の住民基本台帳に基づいた年齢別人口分布でアンケートを配信し、30,000人から日常の勤務状況について回答を得た。そのうえで、就業状況により抽出したシス824人（20～59歳の性年代で均等割り）、トランス167人（18歳～59歳）に対し、オフィストイレの利用実態について調査を行った。なお、トランスについては回答者補完のため、SNSなどでも132人から回答を集め、合計299人（FTM：86人、FTX：73人、MTX：54人、MTF：86人）^{注1)}に対して調査を行った。

3. 調査結果

3-1. 利用したい／利用しているトイレの種類

シス、トランスそれぞれがオフィスで利用したいトイレ（希望）と、実際に利用しているトイレ（実態）の種類を図1に示す。

シスは男性の場合であれば、93.0%が自認する性である男性トイレを希望しており、また実態も95.6%が男性トイレと、希望と実態に大きな違いが見られない（シス女性も同様）。それに対し、トランスはMTF（Male to Female）の場合であ

ば、自認する女性トイレを希望する者は57.0%であるのに対し、実際に女性トイレを利用している者は37.2%と、希望と実態に差異が見られた。また、MTFの中でも出生時の戸籍性別である男性トイレを希望する者は19.8%、多機能トイレは12.8%、男女共用トイレは10.5%と、同じジェンダーであっても利用したいトイレの種類は様々であることが分かった。これは、回答者の職場でのカミングアウト状況、性別違和の程度やそれに対する対応状況が影響していると考えられる。

性別不問の多機能トイレや男女共用トイレを希望する者はシスよりトランスの方が多く、トランス全体では35.1%（多機能：17.4%、男女共用：17.7%）いる。中でもXジェンダーで希望する者が多く、FTXで42.5%（多機能：23.3%、男女共用：19.2%）、MTXで53.7%（多機能：27.8%、男女共用：25.9%）であった。

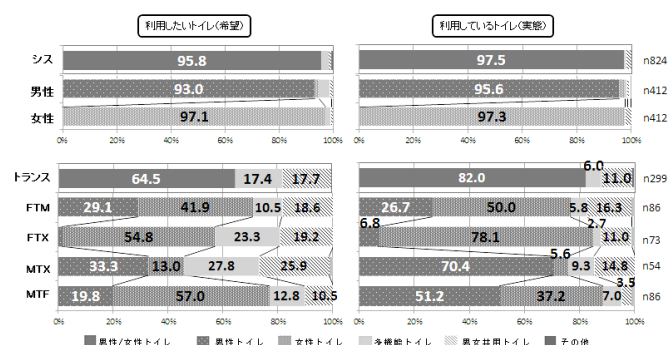


図1. 利用したい／利用しているトイレの種類

3-2. トイレ利用における希望と実態の一致度

トランスのトイレ利用において希望と実態に差異が見られたことから、シス、トランスそれぞれの希望と実態の一致度を図2に示す。シスは95.4%が希望と実態が一致しているのに対し、トランスは61.2%と低い。不一致の理由をアンケート調査の自由回答（以下、FA）から確認すると、「一部の社員から理解が得られない」といった、その1でも示したシスの意識が影響しているものもあった。また、「雇用上の都合により仕方なく」、「職場ではカミングアウトしていないので」といった、勤務状況やカミングアウト状況による声もあった。

そこで、トランスがどの性別で働いているのかといった勤務状況（職場での性別の希望と実態の一致度）を図3に示す。

トランスジェンダーの 44.6%がそもそも希望する性別で働くことができおらず、これがトイレ利用の希望と実態の一致度にも大きく影響していると考えられる。希望通り出生時の戸籍性別で働いている者もトランス全体では 35.5%いるが、中には自認する性別で働くことを諦めている、または割り切って出生時の戸籍性別で働いている者もいると考えられる。トランスが利用しやすいオフィストイレの実現には、まずはトランスが働きやすい、自身が望む性別で働くことができる環境を整えることも重要である。

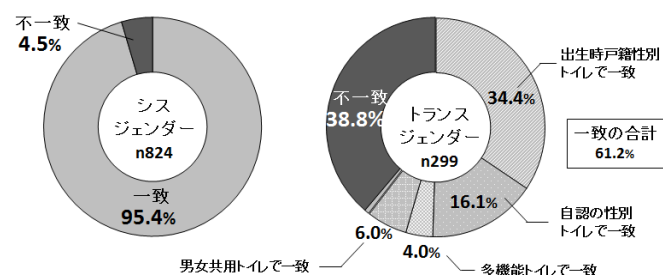


図2. トイレ利用の希望と実態の一致度

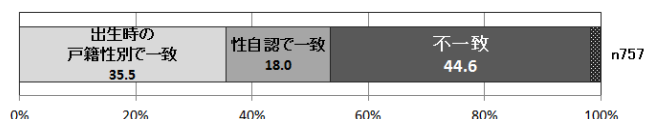


図3. トランスの働いている性別の希望と実態の一致度

3-3. カミングアウトとトイレ利用の希望と実態の一致度

トイレ利用において希望と実態が不一致の理由の FA として、「カミングアウトしていない」という声も多かった。そこで、社内でのカミングアウト状況を図4に、カミングアウト状況によるトイレ利用の希望と実態の一致度を図5に示す。

カミングアウトについては、社内で誰1人にもカミングアウトをしていない者が 34.4%と、まだまだオープンにしばらく職場環境であることがうかがえる。また、カミングアウトしている場合は 49.7%が人事権限者になっている。トランスの場合はホルモン治療など性別違和への対応をすることで見た目が変化すること、また健康診断などの課題もあることから、人事権限者にはカミングアウトしている者が多いのではないかと考えられる。

カミングアウトとトイレ利用の希望と実態の一致度については、カミングアウトしている者の方が不一致の割合が少なかった。また、自認する性別のトイレを希望通り利用できている者は、その他社内の人にはカミングアウトせずに人事権限者のみにカミングアウトしている場合の方が多く、より多くの社員へカミングアウトすることで一部から反対意見が出て、希望するトイレを利用できなくなるという課題も FA から浮き彫りになった。

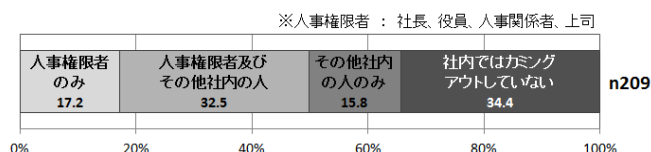


図4. トランスジェンダーの社内でのカミングアウト状況

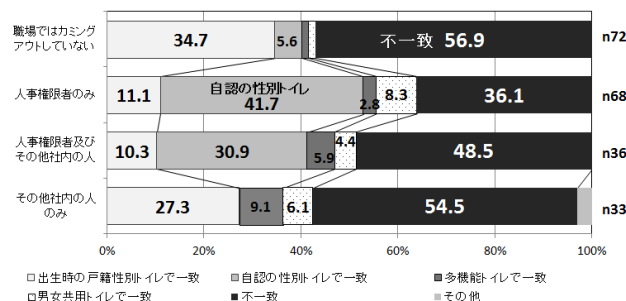


図5. カミングアウトとトイレ利用の希望と実態の一致度

4. まとめ

調査の結果、以下のことが分かった。

- 1) オフィスで利用したいトイレはトランスの中でも様々で、「トランスジェンダー」と一括りにすることはできない。
- 2) 設備面での最優先課題であった「トイレの選択肢」として、出生時戸籍性別や自認する性別に沿って利用する「男女別のトイレ」と、多機能や男女共用などの「性別不問のトイレ」を選べる環境をつくることが重要である。
- 3) 誰もが使いやすいオフィストイレの実現には、トランス含めて皆が働きやすい職場環境を整えることも重要である。
- 4) 職場でカミングアウトすることでトイレ利用の希望と実態の一致度が上がる傾向が見られたが、カミングアウトは本人の意思に基づいて行うものであり、強制するものではない。当人がカミングアウトした場合は、当人と協議のうえ周囲の理解を得ることも重要である。

次報では、「トイレの選択肢」としてあがった「性別不問のトイレ」である多機能トイレの利用実態、今後のあり方について報告する。なお、本報告は「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」（金沢大学、コマニー(株)、(株)LIXIL）で行った調査を取りまとめたものである。

注

注1) FTM は Female to Male、FTX は Female to X-gender、MTX は Male to X-gender、MTF は Male to Female の略である。

参考文献

- 1) (株)LIXIL、NPO 法人虹色ダイバーシティ、2016 年、「性的マイノリティのトイレ問題に関する WEB 調査結果」
- 2) 高橋未樹子、日野晶子他、「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究」（その 1~2）、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、2018 年 9 月、pp.759~761

*コマニー株式会社

**株式会社 LIXIL

***金沢大学 人文学類 准教授 文修

* COMANY INC.

** LIXIL Corporation

*** Assoc.Prof, School of Humanities, Kanazawa University, M.A